

親子で北岳バットレス

佐藤 健

■山行年月日:平成 30 年 8 月 11 日
~14 日

■メンバー:佐藤健 佐藤凜一(息子・非
会員)

正月に息子が帰省したときに親子で北岳バットレスに行きたいなという話をしたような記憶があるが、すっかり忘れていた。6月頃に凜一と電話したときに、その話を息子から持ちかけられた。「お父さんが元気なうちに北岳バットレスに行こうよ」と。「まだまだ元気だわい。クライミングはかなわないけどアプローチの登りではまだまだ負けんわ」と突っ込みを入れたい気持ちをぐっと我慢して「わかった。何とか休みがとれるように調整してみる」と答えて電話を切った。かくして北岳バットレスへの準備が始まった。本人には特にこだわりのルートはなく父に任せるということなのでまずは第四尾根を登って余裕があれば2本目を考えることにした。

8月11日(土)

13:00 まで福島市で仕事をし、13:16 の新幹線で白河に戻り、15:00 に白河を出発し凜一の住む古河市着 17:00。ここに届くようにしていた登攀用具の到着を待って 18:10 に古河を出る。加須インターから高速に乗り、北関東自動車道で中央道を目指す。首都高を通過していた頃に比べるとずいぶん便利になったものだ。八王子で中央道に合流した後、白根 IC で降りる。芦安駐車場に 20:50 着。バ

ス停前でトイレのある第 2 駐車場に止めることができた。あとは天気祭りをして車中泊。車の屋根をたたく雨音が気になりながらも 23:30 に就寝。

8月12日(日)

4:30 に起きて支度をしていると、乗り合いタクシーの運転手に声をかけられ、バスより 100 円くらい高いがバスよりも早く着くというので乗ることにする。雨は降ってはいないが、いつ降ってもおかしくない鉛色の空だ。4:55 に乗り合いタクシーで出発。途中夜叉神峠のゲートが開く 5:30 まで車内で 10 分ほど待つ。広河原着 6:00。吊り橋を渡り、広河原山荘で計画書を出したり朝食を食べたりして出発 6:30。ガチャ類の重さが応える。他の登山者の軽装備がうらやましい。凜一も父にやや遅れながらも着いてくる。白根御池着 8:50。テント受付して設営し、支度をして 10:05 偵察に出発。

大樺沢左岸の登山道を登り 2 つめの涸れ沢が b 沢で、第四尾根にはここから近づくのが一般的とガイドブックに書いてあったので、ここから入ることにする。上部の岩場はガスの中で全く見えない。沢をある程度詰めた後右岸に踏み跡があるとのことだったので、それを意識しながら進むとそれらしい踏み跡があった。そこに入るも少し登るとまた踏み跡がなくなるという始末。ここは、忠実に沢を詰めた方が早い。

b 沢を詰めていわゆる下部岸壁の下

についたのが12:00。ガスでよく見えず、どこを登ったらよいか分からない。支点も見当たらない。明日晴れたら分かるだろうと、あきらめる。下りは、例の踏み跡が見えたのでそれを下るとガスが切れてきたので、別の取り付けであるdガリーの偵察に行くことにした。急なガレ場を慎重にトラバースして行くも何とも不安定で、ロープも持ってこなかったことから、これまたあきらめて元のb沢上部まで戻る。踏み跡がはっきりしなくなったところでb沢に入り、14:00にテント場に戻る。

8月13日(月)

4時30分ヘッドランプをしてBC発。b沢は、昨日の偵察で学習したとおり、沢を忠実に詰める。6:15下部岸壁の取り付け着。昨日はガスで全然見えなかったが、赤い岩にクラックがはっきり見える。今日は天気がよく快適なクライミングができそうだ。

ここが下部岸壁のbガリー大滝といわれる所だ。支度をしてクライミング開始。1p目

(Ⅲ級)赤い岩のクラックを凧一トップで登る。傾斜が緩んだところにビレイ
下部岸壁一P目を登る凧一



点。2p目(Ⅱ級)は健がトップで20mくらいで終了点。ロープをたたんで少し登ると左側のブッシュ帯からフィックスロープが垂れている。ロープを使う必要はないがその根元に向かって登ると左側にトラバースの踏み跡を発見。踏み跡を辿るとc沢(涸沢)が見え、向こう岸にも踏み跡を発見。c沢を横断して踏み跡に入っすぐのテラスで10分ほど休憩(7時53分)。さらに踏み跡を10m程進むと四尾根の取り付けテラスがあった。ただしガイドブックの取り付けではない。(本によると、ブッシュ帯を100mほど登った所が四尾根への取り付けと紹介されている。)しかし、ちょうどいいテラスでビレイ点もしっかりしているの、ここから登ることにする。-2ピッチ目(V級)は凧一トップで登り始め。はじめのフェース5mは微妙なバランスを必要とし結構むずかしいのでV級としてみた。全ピッチの中で一番むずかしいのがここだった。V級としたのは、4p目の最後の垂壁がV級となっていたからだ。そこよりやや難しい。-1ピッチ目(Ⅲ級)は健トップで、傾斜も緩く15mくらいで終了点。ここが本来の取り付けポイントで、テラスも広い。

ここから本来の1p目(Ⅲ級)。凧一トップでクラックではランニングに今回新調した軽量カムを決めながら快適に登る。2p目(Ⅱ~Ⅲ級)は健トップでフェースに登る。終了点

は c 沢側に少し回ったところにテラスのビレイポイント有り。3p 目(Ⅲ級)は白い岩のクラックを凍一トップで登る。4p 目は健トップで、途中からリッジになる。そして核心といわれる 3m の垂壁(V 級)へ。垂壁というが 90° はない。ピンはあるので安心感はある。V 級とあるが、それほどでもない感じ。垂壁を越えると、傾斜は緩いが、両側が切れている高度感のあるリッジ。その先 10m くらいの所に、ビレイ点であるマッチ箱の頭が見える。ロープの残量を聞くと足りそうなので、そのままリッジを四つん這いで進む。

ここから d 沢側に 10m の懸垂下降だ。次の 5p 目(Ⅲ級)は健トップで緩いクラックからリッジ、上部がよく分からないので、左側の狭いテラスに逃げ、残置ピトン 1 本と岩角にシュリングを掛けピッチを切った。6p 目は凍一トップでリッジを詰めると右側と前方にスパッとリッジが切れてしまい、上へは行けない。おそらく、ここが十数年前に崩壊した所だろう。本によると、リッジを登ると枯れ木テラスに届くという。そんなリッジはない。左にしか行けないリッジを掴みながら 10m トラバースすると、ビレイポイントがある。その上に見えるのが城塞チムニーだ。ロープは大きく屈曲しているのでここでピッチを切るしかない。

7p 目健トップでかぶっている城塞チムニーに挑む。ここで雨が降り出し、しかも結構強く降っている。Ⅲ級というが、かぶっていると難しく感じるのは雨のせいだったのだろうか。城塞チムニーを

抜けるとすぐに枯れ木テラスだ。雨が強い。フォローの確保の準備を急いでする。上がってきた凍一は、歯をガタガタさせながら全身を震わせている。聞くと、ハングした岩から流水の放物線がちょうどビレイポイントに落ちていて、ビレイ中ずっと滝業をしていたとのこと。すぐにシャツを脱がせ、乾いたフリースにカップを着させた。それでもガタガタ震えている。このとき 12 時 15 分。頂上までスピードをあげて歩けば暖まるだろう。コールが聞こえる下を見るとマッチ箱の頭に人が見えた。我々も決して遅くないと思うが、彼らは早い。ここでロープを外してもよいと思ったが、緩い傾斜の岩場がまだ上に続いているので、雨で岩が濡れていることもあって、あと 1p だけロープをつなぐことにした。踏み跡に出たところでロープをほどいた。あとは北岳山頂まで、冷えた体を温めるべく一生懸命歩くのみである。北岳山頂に 12 時 55 分着。凍一の体もすっかり温まったようだ。写真を撮って行動食を食べて天気回復を待つがガスの中だ。13 時 25 分下山開始。「下りは原則走る」という、父の教えを覚えていたのか、凍一トップで駆け下ると、今度は体が熱くなって、カップを脱ぐ休憩だ。小屋着が 14 時 55 分。ガチャ類を整理し、濡れたものを干してちょっと落ち着いてから、人生初、小屋で生ビールを買って息子と乾杯。忘れないうちに記録を書くことにした。といっても、凍一のスマホに、父がしゃべったことを入力してもらうのだ。さすがはスマホ世代、入力は早い。ちなみに、予備バッテリーも持ってきている。これ

がないと不安らしい。近くでは、四尾根を登っていた別パーティーも反省会をしていた。どうやらガイド登山らしい。どおりで早いわけだ。テントに戻り、明日の予定について話す。明日はヘリがくるので7:00前に撤収しなければいけない。明日の天気もいまいちだ。シャワータイムはもうごめんということで、翌日は下山に決定。

8月14日(火)

小屋を6:05に出て広河原7:15。乗り合いタクシーに7:55に乗って芦安駐車場8:40。9:00開店の風呂に入って9:30駐車場発。古河に12:20。4号線で白河着16:00。

かねてから行きたいと思っていた北岳バットレスに息子とロープをつないで登れたことは格別である。凜一にとっては初めての日本アルプスで、しかも日本第2位の頂にバリエーションルートから登ったというおまけ付きだ。父にも子にも達成感はある。しかし、何かが足りない。父には、岩登りの楽しさだけでなく、南アルプス北岳からの大パノラマ

を見せたいと思いがあつた。それが「山登り」の醍醐味だからだ。北西側に見える仙丈カール、北に見える甲斐駒とオベリスク、その先に見える八ヶ岳、その奥に霞んで見える北アルプス。そこから南東側に目をやれば雲海に浮かぶ富士山。こんな風景を見せてやりたかった。凜一は、谷川岳の南陵、韓国のイースボンに次ぐ3回目のマルチピッチだが、過去2回に比べて荷物は重く、狭いテント泊という新しい登山のスタイルを経験したことになる。少しは岳人に近づいたかもしれない。快適なクライミング(雨以外)と山での生ビール、楽しかったろう。でも、「たまにはこんなのもいいかな」が本音だろう。彼は5.13クライマー。登る対象やスタイルが私とは根本的に違うのだ。この冬は、高校の同級生と、7回目?の海外クライミングに出かける。スペインの岩場で5.13級を登ってくるという。

でもやっぱり、あの大パノラマは見せてあげたい。「お父さんが元気なうちに」また行こう。

